

# 小学校2年生国語科における季語さがしと俳句づくり

— 生活科学習との連繋の試み —

島本 政志\*, 皆川 直凡\*\*

(キーワード: 国語科, 俳句創作, 生活科学習)

## はじめに

子どもを取りまく近年のさまざまな問題の発生から、こころの教育のあり方についての議論が活発になっている。子どもたちの心の未熟や孤立を生む人間関係の問題が指摘され、知力・学力偏重の学校教育の問題性も多く語られる。そんな中で、感性に富み、賢さと優しさを兼ね備えた真の意味での知性を育む諸要因を探究し、個々の子どもの特徴に配慮しつつ協同的で豊かな学びを支援・促進する教育プログラムの開発が要請されている。

皆川 (2005) は、知性と感性を育てる教材としての俳句の可能性を示唆した。日本人は、自然、文化、そして人間とのふれあいを心に刻み込む手段として、俳句という短詩型を創造し、世界に向かって発信している。十七音という制約のなかに、この世で出会うすべてのものから感じとった心を自らの感性と知性で選び抜いた季語に託して表現する。それが俳句である。金子 (2014) は、子どもの頃から俳句に触れることの最大の利点は「感性が養われる」ということであるとし、十七音という短い定型詩である俳句では無駄な言葉を使えないため最適の言葉を選べるようになることから、言葉を大事に使える人間になるはずだとしている。これにより、知性の伸長がもたらされる。上記の特徴を有する俳句は、冒頭で述べた教育プログラムの素材として有用と考えられる。

## 1. 問題と目的

### 1. 定型が醸成する俳句の魅力

俳句の楽しさ、素晴らしさは、季語との出会いから生まれる。季語とは、先人たちが生活の中から紡ぎ上げてきた季節を表す言葉である。自らの周囲に満ちあふれた生き生きとした出会いを季語と結び合わせることで俳句が生まれる。したがって、若者は瑞々しい感性で素直に詠むことができるし、人生経験を積んだ人には深い味わいが滲み出てくる。それぞれの良さが自然に表れ

るのである。ただ共通するのは、誰が詠むにしても、その根底にあるのは季語だということである。

古来、日本人は「花鳥風月」と言って自然の美しさを愛でてきたが、単に「花」と言えば春の季語になり、「月」といえば秋の季語になる。生活の中で生きた季語を体験し、味わいながら、自分の感性と知性で一行の詩にしていく、一つ一つの出会いから生まれるこころの揺らぎを率直な言葉で詠んでいく、これが俳句の基本である。

俳句には、五・七・五という定められた型、つまり定型があり、この定型という器に一人一人の作者の心を、感動を、発見を盛り込み、仲間と伝え合う。共通の器を使うからこそ、お互いに相手の心の形がよく理解できるのである。十七音で成り立ち、五音・七音・五音の組み合わせの音律を基調としている、それが俳句である。この十七音の韻文詩形式は、日本語の調べとしてとても自然で、すーっと心に染み込んでくる。口ずさんでみると、きりりと引き締まっていて、しかも飽きることがない。安定と変化を兼ね備えた詩型であるといえる。極めて簡潔でありながら、集約、余韻といった独自の効果も生み出す。この点に関連して、中村 (1959) は知・情・意の働きにより人間は真・善・美を獲得するとし、それぞれの文の目的について、以下のように説いた。「散文は知の働きによって真を獲得することを主な目的としている。一方、韻文は言葉にともなう音楽的要素を利用して美を生み出すとともに、作者の心の中に充ちている情を読者に感じさせ、伝達しようとする目的の下に発生してきた」。また、茂木 (2008) は、短詩型である俳句の「言語化されていない」部分が読み手に強い印象を与え、それが俳句の大いなる力であると述べている。

### 2. 俳句指導の実際

本稿における授業づくりの参考とするため、知性と感性の育成を目指して第2著者らが手がけてきた、俳句を教材とする授業実践を検討する。

皆川・大黒 (2003) は、文献研究の成果に基づいて、

\*寝屋川市立東小学校

\*\*鳴門教育大学 高度学校教育実践専攻 (教職系)

俳句の創作と鑑賞を軸とする国語科学習指導案を作成し、小学校6年生1学級において授業を実施した。その結果、児童の俳句作品集と鑑賞記録から、複数の心理学用語で表される多様な自画像を読みとることができた。いずれも、自我同一性の確立期に、さまざまなものとふれあい、感じたことを表現することの意義を実証する内容である。俳句が五感を適度に刺激し、創造性を高める素材であることの証明でもある。

皆川・正岡(2008)は、多角的流動的に移り変わる現代社会を生き抜くためには、自ら気づく感性と自ら選択し判断し決定し行動する知性が求められるとし、人間関係を築く力の低下が憂慮されていることから、教育の役割はますます大きくなっていると論じた。また、自己を見つめ他者と関わり合うことで、自己の理解力や表現力を高め、他者理解を深めていくことができる協同的活動は、知性と感性の育成を促進すると考えられるとした。さらに、人間関係を築く力の育成には、コミュニケーションスキルの向上など外的対人関係能力と、自己や他者のよさを認める気持ちをもつなどの内的対人関係能力の両面からのアプローチが必要であり、協同的活動はそれをも可能にするとした。そこで、協同的活動を促進する素材として、日本語の美しさや季節感を感じさせ児童の健全な成長によい影響を及ぼすメディア(皆川, 2005)である俳句に注目した。俳句を素材とする協同的活動の場を、形態を変えながら繰り返し設けることで、知性と感性、さらには、よりよい人間関係を築く力の育成が促進されると考えられるとした。このような枠組による教育プログラムを構築し、その効果を検証することを目的として、小学校における「総合的な学習の時間」において、下記のような授業をおこなった。単元名を「心と心をつなごう」とする4時間配当の単元とし、次に示す4つの活動を含む授業構成とした。①俳句を作る②自分の作品を紹介する③班の代表俳句を決める話し合い④代表俳句を題材として討論する。①と②の活動では主として自分の思いや考えを明確に表現する力の育成をはかり、③と④の活動では、主として自己と他者のよさを認める気持ちの育成を目ざした。俳句作りの過程での季語の選択や十二文字の文作り、および俳句選びの過程での指導者の支援、俳句紹介や代表俳句の選定を行う班活動、班対抗の討論など、異年齢ならびに同年齢間での相互作用の機会を多く設けた。教育対象は小学校5年生2学級、授業者は大学院学校教育研究科に在籍する小学校教諭であり、第2著者が補助者となった。1時間目には、俳句を作る活動を行った。ビデオ教材を作成し、「取り合わせ」という親しみやすい作句方法を教授するとともに、いつでも相談できる雰囲気を作ることで、俳句作りに関する経験差や苦手意識を払拭していくことを目指した。俳句作成カードを用意し、円滑に作句ができるよう配慮した。自

分が気に入った俳句を選句カードに記入することで、次時の発表に活用できるようにした。さらに、「自分が俳句にこめた思いを書いておこう」と教示し、発表原稿用紙に記入させた(=宿題)。2時間目は、各自の俳句を班内で発表し意見を述べ合うことにより、代表俳句を決定する活動を行った。話し合いの進め方カードを各班に配布し説明を加えることで、自主的な話し合い活動を促進することを目指した。3・4時間目には、各班で決定した俳句を持ち寄り、紅白俳句バトルを行った。1対1の5回戦で勝敗を決することにし、各回戦の話し合いには、パネルディスカッション形式を取り入れた。自分のチームの代表俳句のよさの主張、相手チームの代表俳句に対する疑問、意見などが話し合いの中で表出されるように指導・支援した。判定者は4名(大学教員1名、大学院生1名、学級担任2名)とし、俳句内容と話し合いの仕方を判断基準におき判定した。回戦ごとに判定者の講評を求め、話し合いの質について児童に示すことを目指した。指導者から特別賞を用意することで、選ばれなかった児童に対する心的配慮を行った。1時間目の俳句創作時の宿題として、発表俳句についての思いや考えを記述することにより、2時間目の班学習において、友達に対して自らの俳句に込めた思いをうまく伝えることができた。また、2時間目に班の仲間との伝え合いが十分に行われた結果、3・4時間目の俳句バトルにおいては、仲間の俳句のよさを他の班に対して主張することができた。本研究の成果は、俳句を素材とする協同的学習が、知性と感性、さらには、よりよい人間関係を築く力の育成を促進する可能性を示唆するものである。

さらに、皆川・横山(2013)は、ヴィゴツキーによる「発達の最近接領域」の理論(ヴィゴツキー, 2003)を基盤とし、俳句を題材とする授業の分析を行い、子どもの発達の最近接領域を考慮した学習指導の在り方について考察した。小学校5年生3クラスを対象に、3時間の授業観察を行った。第1時(秋から冬への情景や行事、遊びや食べ物、植物や動物など、季節感を味わえるもの・ことを思いうかべ、季節のことば集めをする)、第2時(自他が集めた季節のことばを用いて、切れ字を使うなど表現に工夫を凝らしながら俳句を作る)、第3時(作った俳句を詠み合ったり、読んだ俳句に関する感想を書き合ったりする)の3時間計画であった。この授業には、日本発信の文化であり、体験にともなう感動表現の有力な方法でもある「俳句」の創作・鑑賞ならびに他者との共感・相互作用体験をとおして、児童が俳句のよさを感じることでできる活動が組み込まれていたため、「俳句を媒体とする感動・共感体験の心理学的意義」の分析を試みた。その一環として、第1時の前と第3時の後に質問紙調査を実施した。事前質問紙の結果、天気や空の様子から季節を意識することがもっとも多く、次いで、四季

の花や木のように目を向けたり、おいしいもの（食べ物）が季節によって少しずつ違うことに気づいたり、季語をたくさん知りたいと思うようになるという傾向がみいだされた。事前質問紙と、事後質問紙の共通質問について両者の結果を比較したところ、季語の種類に関する知識が増えたという回答が増大する一方、もっと多くの季語を知りたいという回答も増大するという傾向が見出された。また、事後質問紙にのみ設けられた、俳句づくりの学習の前と後での自らの変化を問う質問の結果、目に見えないような季節の変化を感じるようになり、その変化をことばで表してみようと思うようになり、実際にことばで表すことができるようになったと回答した児童が70%近くにのぼった。さらに、上記の選択をした児童の多くが、実際に、直接的な表現を用いずに季節感を表す俳句を創作していた。比喩表現を効果的に用いて季節感を表現している句がみられる点で、授業で取り上げられた、2つの言葉をつなぎ合わせるなどして、目に見えない「季節の感じ」や「季節の移り変わり」を表現してみる活動が生きていると考察された。事後質問紙には、自由記述式の質問も設定され、自分が見付けられなかった季語を友達がたくさん見付けていて、「なるほど」と思ったなどと述べ、俳句の創作にあたり友達の意見からヒントを得たことを表明した児童もみられた。季語を多く使えるようになったこと以上に、自身の気持ちを季語に託したり、比喩や倒置法などの表現技法を活用できるようになったりしたことを実感している児童もみられた。このように、授業での「季節のことば探し」における発表が、児童の俳句創作に大きな影響を与えているということが示唆された。俳句創作における楽しさや興味、得意になった、できるようになったなどの記述もみられたことから、季語の使用や知識に関する能力が「秋から冬へ」の授業を通して身につけていることも示唆された。このように、創作活動の喜びや楽しさを多くの児童が感じていたことに加え、鑑賞し合うことによって俳句をつくった人の気持ちを知ることの楽しさや、俳句を通して他者とふれあう喜びを感じる児童も多かった。上述の結果より、児童が俳句に対する楽しさや興味、達成感を感じる要素として、季節を表すことば（季語）を新しく知ることができること、季語に自身の気持ちを込めて表現できること、他者と作品を読み合うことで相手の考えていることや個性を知ることができること、他者と作品をよみ合うことで自身の気持ちや考えを相手に伝えることができることなどがあると考えられる。また、俳句を創作する授業を通して俳句作りそのものへの関心・意欲が高まったというだけでなく、それと共に季節の変化にも注意が向くようになったと考えられる。つまり、俳句の創作の授業は国語科のみに留まらず、理科教育との関連が見込めるということが示唆された。

### 3. 小学校低学年における教材としての俳句の魅力

#### ―生活科との接点―

上述のように、俳句を教材とする授業実践研究は、主として小学校高学年において行われてきた。学習指導要領における各教科の国語の項に、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」があるが、俳句が取り上げられるのは、中学年（第3学年及び第4学年）であり、「易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること」とされている。

しかし、低学年（第1学年及び第2学年）においても、俳句を用いた教育実践の場はたくさんあると考えられる。暗唱、カルタ、作句（俳句づくり）などである。どれも子どもたちは楽しく取り組むと思われるが、とりわけ、俳句づくりに一番の魅力が感じられる。実感のあることばを探して、俳句を作り上げるという、その過程こそが俳句実践の魅力であると考えられる。カルタとりは短歌でも行われ、暗唱についても音読スキルといった教材があり、俳句に固有のものではない。これに対し、五七五のリズムで作るのは俳句ならではのこである。

学校には季節ごとの行事がたくさんあり、給食にも季節のものが出てきたりして、本来は季節感を感じることができる場であると考えられる。ただ、授業は教室の中で行われるため、子どもたちは「桜がさいている」「花がちっていった」「梅雨で雨がふっている」といった、大雑把な認識しかできていないようにも思われる。しかしながら、俳句を作ろうとすることで、校内を歩き回ったりして季節の変化を知ることができる。机の上だけで言葉を用いて創作するのではなく、実際の体験をさせることができる。つまり「自分の実感のある言葉」の学習である。学校外において家族で遊びに行っているときには、さまざまなことを感じていると考えられる。うれしかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、さみしかったこと、季節の移り変わりなどである。ただ、これらの感情はすぐに過ぎ去ってしまうため、俳句を作ろうとして、それらの感情を言葉にしようと思い出し、なんとか言葉にすることに価値があると考えられる。

#### 4. 本研究の目的と意義

金子（2014）は実作者の立場から、俳句教室についての書籍を監修し、子どものうちから俳句になじむことは、たいへんよいことであるとし、純真な感性を五七五のリズムに乗せて口ずさみ、俳句を生み出すことによって、日本語の魅力や体を覚えていくと説明している。俳句の基本は、ものをよく見ることでありとされている。ものをよく見て感じることで、感性が磨かれる。そのものに対する愛情が湧き、さまざまなことに気づくことができる。また、知らなかった言葉を知り、国語力や表現力を



身につけることができる。

一方、以下のような考えもある。暗記する力は小学校低学年でもあり、スイミーの物語などは単元の終わりにはほとんどの子どもが暗唱してしまう。したがって、語彙だけ増やそうとすれば、いろんな暗唱をさせればよいということになる。

しかしながら、俳句は五音、七音、五音の言葉を組み合わせればできてしまうので作りやすいし、何よりも、作るために教室を出たり、自分の体験を思い出したりして、自分の実感のある言葉を探し、つくりだすこと、言葉を操作して自分の感情を表現することは、「伝統的な言語文化に親しむ」ということを含めて、国語科の教科目標とも合致すると考えられる。

なお、学習指導要領では「低学年においては、生活科などとの関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること」とされているが、俳句づくりをとおしてこのことを実現できる可能性もある。本稿では、このことを考慮した授業づくりを提案し、実践する。

## II. 授業実践

### 1. 対象および時期

N市立S小学校2年1組の児童32名を対象として、2018年7月17日に実施した。第1著者の担任学級であり、本授業実践も第1著者が担当した。

### 2. 単元について

単元名は、「夏のことばをさがしてはいくをつくろう」とし、単元目標は「夏に関することばをさがし、経験と結び付けて思ったことや伝えたいことを葉書に表すことができる」とした。

2年生の子どもたちに季節の言葉を探させようとする、「桜がさいてる」「花がちった」「梅雨で雨がふっている」といった、おおざっぱな言語表現をすることが多い。このことから、本単元では児童の発言とあわせて、経験も語るようにうながす。例えば児童が「せみ」と発言した時には「どうしてせみなのか」と問うこととする。この問いに対し「最近、朝からよくせみが鳴いているから」などと答える児童がでてくる。すると他の児童たちも「ああ、わかる」「ぼくも同じことを考えてたよ」などと共感しながら、自分の言葉を見つけようとするができることが予想される。

学習指導要領において、俳句を音読したり暗唱したりする学習は3年生に位置付けられている。国語の教科書でも、扱いも3年生からである。そのため本単元では本格的な俳句づくりではなく、俳句の5・7・5のリズムをいかした、思ったことや伝えたいことを書く活動として行う。教科書では「カードに書きましょう。」となつて

いるが、葉書に書くことにした。こちらの方が読者を想定しやすく、思いや考えを伝えあおうとする態度の育成につながると考えたからである。また、本単元は生活科の公共施設を利用する活動としての郵便局見学で、自分が書いた葉書を出すという活動にも繋がっていると考えられる。

### 3. 授業の展開

巻末資料に掲載した学習指導案に沿って、授業を展開した。その概要を以下に示す。

#### (1) めあての提示

「暑中見舞」と呼ばれる夏の挨拶状について説明し、暑中見舞の葉書に俳句という、短いメッセージを書くという学習活動を行うことを知らせた。

まず、「もうすぐ夏休みですね。郵便局から葉書をもらいました。暑中おみまいというものです。暑中おみまいというのは、親戚の人や普段会えない人にお葉書を送って、『ぼくは、私は元気です。あなたは元気ですか?』と伝える葉書です」と説明した。

つぎに、「この葉書に俳句という、短いメッセージを書きます」と伝え、めあてを板書した。本時のめあては、「夏のことばをさがして俳句をつくろう」であった。板書後、全員で、めあてを音読させた。

#### (2) 夏のことばをさがす

夏であると感じたり、わかったりする言葉をさがすという学習活動をおこなった。「夏だなあって感じる、分かる言葉、どんな言葉があるかな?」と発問し、児童の答えを板書した。

#### (3) 季語という言葉を知る

児童の答えに季節の言葉を「きご」と呼ぶことを知らせた。「こういう季節のことばを『きご』といいます。季節のことばという意味です」と説明した。

#### (4) 俳句を音読する

松尾芭蕉の「ふるいけや かわずとびこむ みずのおと」を板書し、全員による音読を促した。「みんなで読んでみよう(ふるいけや かわずとびこむ・・・)」と教示し、読み終わったときには「上手によめました」という言葉をかけた。

#### (5) 音読した俳句のなかの言葉の意味を知る

「ふるいけ」、「かわず」をとりあげ、「どんな意味だと思おう?」と発問し、それぞれ、「古い池」、「かえる」という意味であることを伝えた。

#### (6) 音読した俳句の意味について考える

子どもたちに考えさせたあと、教師が「かえるが、古い池にとびこんだら、ぼちゃんと水の音がしていい音だなあと思いました」という意味が込められているんだよ」と伝えた。

(7) 俳句は5・7・5の音でできていることを知る

俳句は5・7・5の音でできていることを知らせ、みんなで数えさせた。「俳句は5・7・5の音でできています」と述べ、「みんなで数えてみよう」と働きかけて、実際に、5・7・5の音でできていることを体験的に理解させた。

(8) 俳句の特徴について考える

「二回目の運動会は ○○○○○」を板書し、空欄に当てはまる五音の語を考えさせた。このとき、感情を表す言葉は使わないことを伝えた。「楽しいな」「うれしいな」を入れてしまうと、表現の工夫が生まれにくいことに気づかせるようにした。

「二回目の運動会は ○○○○○」の板書を指しながら、「ここに入る言葉を考えてみよう」と指示した。「ただし、楽しいなとかうれしいな、という言葉は使いません」と付け加えた。複数の児童とのやりとりの後、「楽しいとかうれしいって言わずに、楽しさやうれしさがわかるようにするのが俳句なんだよ」というまとめをして1時間目を終了した。

(9) 俳句をつくる

ここから2時間目に入った。「じゃあ、自分で俳句をつくってごらん」と教示し、俳句の創作を指示した。

(10) 葉書に自分の選んだ句と絵をかき

自作の俳句から、葉書に書く俳句を選ぶ。

### III. 結果および考察

1. 授業展開 (2)夏のことばをさがす

では、つぎのような言葉があげられた。「あつさ、虫、カブトムシ、セミ、クワガタ、アゲハチョウ、かきごおり、ソフトクリーム、海、およぐ、ハワイりょこう、やける、あせをかく、やきにく、すいか、太陽、花火、プール、キャンプ、夏祭り、おばけやしき、アイス、せんぷうき、うちわ、クーラー、ワールドカップ」

予想していた以上に、沢山の意見がでた。このことから、児童にとって参加しやすかったことが分かる。とくに、「おばけやしき アイス」などは、児童の生活に密着した言葉であると考えられるため、発言しやすい。児童の意見のうち、やきにく、海、ハワイ旅行、ワールドカップには夏らしいイメージがあるが、季語の事典である歳時記には収録されておらず、季語ではない。しかし、「それは違うよ」と言うべきではない。低学年では、厳密に季語を学ばせる必要はなく、リズムを楽しむことを優先すべきである。また、子どもたちがこうした語について詠もうとすれば、その前後に、より明確な夏の季語が置かれることが予想される。

2. 授業展開 (9)俳句をつくる・(10)葉書に書く

わずかな時間に俳句を作る児童が複数いたことから、早くできた児童の作品を紹介することにした。

中には、散文と同じように助詞を使おうとして、5音に収まり切らない助詞を次の7音の頭にもってくるということをしていった。たとえば、下記の例のように。

「カブトムシ がじゅえきを たべてたよ」

このとき、授業者は、以下のようにすれば助詞を省略でき、リズムがよくなるという修正例を示した。

「カブトムシ じゅえきたくさん たべてたよ」

しかし、このようにすればよいという修正例として示すのではなく、ただ2つの例を並べて板書し、「どっちがいいかなあ？」と聞いて、子どもに考えさせればよかったという反省点が示唆された。

早くできた友だちの作品をみて、しだいに筆が進む児童もいた。このようにして、日頃会えない身近な人々（祖父母など）に自分が元気であることや感謝の気持ちを伝えるために、季語を入れて、5・7・5の俳句をつくり、図1に例示するような、オリジナリティのある、感性豊かな葉書作品がつつぎと生まれた。

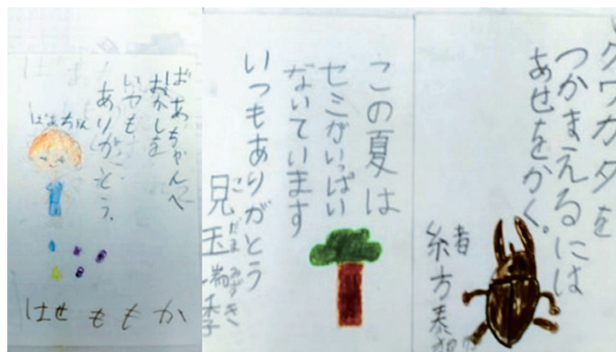


図1：作成された葉書の例

### IV. まとめと今後の展望

2年生の教科書には、俳句が掲載されていないが、教科書の「季節の言葉」を学習して、その流れで俳句をつくることを考えれば、それほど違和感はない。本授業実践では、児童に俳句をつくることを動機づけるために、暑中見舞の葉書に書くという方法を試みた。葉書を用いた実践は目的意識があり、子どもたちも自然とちゃんと考えようとする良さがあつた。生活科の目標の一つに「身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。」とあり、生活科にもいさせる要素があると考えられる。また道徳科の「感謝」の要素も含まれると考えられる。今後の展開が期待される。

文 献

金子兜太, 「なぜ俳句を学ぶのか」, 『子どもと楽しむ俳句教室』, 誠文堂新光社, pp.11 - 24, 2014.  
 皆川直凡, 『俳句理解の心理学』, 北大路書房, 176p., 2005.  
 皆川直凡・正岡繁豊, 俳句を素材とする協同的活動の試みとその評価, 日本教育心理学会第50回大会発表論文集, p.185, 2008.  
 皆川直凡・大黒伸介, 俳句を素材とする協同的学習の展開ー知性と感性の育成を目指してー, 鳴門教育大学学校教育実践センター紀要, 第18巻, pp.103 - 112, 2003.

皆川直凡・横山武文, 子どもの発達の最近接領域を考慮した学習指導の在り方の検討ー俳句をとおした感動・共感体験による季語への関心・知識の深まりー, 鳴門教育大学授業実践研究, 第12巻, pp.19 - 27, 2013.  
 茂木健一郎, 「俳句脳の可能性」, 『俳句脳ー発想, ひらめき, 美意識ー』(茂木健一郎・黛まどか 著), 角川書店, pp. 7 - 33, 2008.  
 中村草田男, 『俳句入門』, みすず書房, 218p., 1959.  
 ヴィゴツキー, L. S., 『「発達の最近接領域」の理論』(土井捷三・神谷栄司 訳), 三学出版, 227p., 2003.

【資 料】

第2学年国語科学習指導案

指導者 島本 政志

1. 日 時 平成30年7月17日(水) 第3・4時限
2. 場 所 東館3階 第2学年1組教室
3. 学年・組 第2学年1組 (男子17名 女子16名 計33名)
4. 単 元 名 「夏のことばをさがして はいくをつくろう」
5. 単元目標 夏に関する言葉をさがし, 経験と結び付けて思ったことや伝えたいことを葉書に表すことができる。

6. 単 元 観

2年生の子どもたちに季節の言葉を探させようとする時, 「桜がさいてる」「花がちった」「梅雨で雨がふっている」といった, おおざっぱな言語表現をすることが多い。

本単元では, 子どもの発言と併せて, 経験も語るように促す。例えば子どもが「せみ」と発言した時には「どうしてせみなのか?」と聞く。ある子が「最近, 朝からよくせみが鳴いているから」などと答える。すると他の子たちも「ああ, わかる」「ほくも同じことを考えてたよ」などと共感しながら, 自分の言葉を見つけようとする事ができる。

学習指導要領では俳句を音読したり暗唱したりする学習は3年生に位置付けられている。そのため本単元では本格的な俳句づくりではなく, 俳句の5・7・5のリズムをいかした, 思ったことや伝えたいことを書く活動として行う。教科書では「カードに書きましょう。」となっているが, 葉書に書くことにした。こちらの方が読者を想定しやすく, 思いや考えを伝えあおうとする態度の育成につながると考えたからである。また, 本単元は生活科の公共施設を利用する活動としての郵便局見学で, 自分が書いた葉書を出すという活動にも繋がっている。

7. 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
季節の動植物に関する言葉を楽しんで探している。	夏を感じた経験を思い出して, 文章に書いている。	季節の動植物や, 季節を感じる言葉を探している。

8. 単元の指導と評価の計画 (全2時間)

時	学習内容	評価基準
1	○夏に関わる言葉を探し, 交流する。 ○俳句の特徴について知る。	【関】友だちに紹介している。 【書】自分の夏を感じる言葉をノートに書く。
2	俳句の5・7・5のリズムをいかした作文を行い, 葉書に書く。	【書】作文を葉書に書く。

9. 指導展開 第1時

主な学習活動	留意点
<p>1. もうすぐ夏休みですね。 郵便局から葉書をもらいました。暑中おみまいというものです。暑中おみまいというのは、親戚の人や普段会えない人に、お葉書をおくって「ぼくは、私は元気です」「あなたはどうか?」と伝える葉書です。</p> <p>この葉書に俳句という、短いメッセージを書きます。 みんなでめあてを読みましよう。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">夏の言葉をさがして俳句をつくろう。</div> <p>2. まずは、夏だなあって感じる、分かる言葉、どんな言葉があるかな?考えてみましょう。</p> <p>3. 発表し交流する。</p> <p>4. みんなが見つけた、こういう季節を感じる言葉を、季節の言葉を「きご」っていいます。</p> <p>5. ふるいけや かわずとびこむ みずのおと みんなで読んでみよう（ふるいけや かわずとびこむ・・・） 上手によめました。どんな意味やと思う?</p> <p>6. 俳句は5・7・5の音でできています。数えてみよう。</p> <p>7. 「二回目の 運動会は ○○○○○」ここに入る言葉、考えてみよう。</p> <p>8. できた作品を発表し交流する。</p>	<p>○その言葉を選んだ理由も述べさせることで、周りの子も共感的に理解できる。</p> <p>○俳句が表現している情景を簡単に説明する。</p> <p>○楽しいな とか うれしいな という言葉は使わずに、その気持ちが伝わる言葉を考えるように促す。</p>

指導展開 第2時

主な学習活動	留意点
<p>1. 季語を使って俳句をつくろうね。</p> <p>2. できた作品を教師に見せる。</p> <p>3. 葉書に自分の選んだ句と絵を描く。</p> <p>4. 作品を発表し交流する。</p>	<p>○一般的には季語とは考えにくい言葉も子どもなりの理由があれば、認める。</p> <p>○たくさん、作るように促す。</p> <p>○字余り、字足らずも認める。</p> <p>○どのような作品も、「よくできているね」と肯定的に受け止める。</p>

